

禪と共に歩んだ先人

山岡鉄舟 XVI

臨濟禪と接し、その精神性や美意識に感化される事により、自分自身を高め、偉大な功績を残した先人達を紹介するという趣旨で進めていこうというこの項ですが、前回に引き続き、幕末から明治にかけて活躍し、現代の日本のあり様にも大きな影響を与えているといえる「山岡鉄舟」についてお話させていただきたいと思います。

侍従番長

明治5年（1872）東京へ戻り、明治帝の侍従に任じられた鉄舟は、ほどなく侍従番長となり、明治帝の最側近として活躍する事となります。

就任翌年、皇居で夜半、火事が起き、寝着に袴を着けて淀橋（現在の中野区）の自邸から急ぎ駆けつけ、帝をお守りした鉄舟でしたが、離れて住んでいては、

この様な火急の際に陛下をお守りするのは難しいと考え、皇居からほど近い、四谷に転居しました。

明治11年、西南戦争後の論功行賞に不満を抱く下士卒が皇居内で反論を起こしました。世にいう「竹橋騒動」です。

この時も鉄舟は寝着のまま袴をはいて、サーベル片手に足袋で御所に駆けつけました。明治帝はすでに起きておられましたが、そばを守るものが誰一人いない状態でした。そのまま一時間ほど側で奉仕しておりましたら、ぼつぼつ人々が参内してきましたが、いずれも参内服に着替えていました。「この危急の際に、服を

着替える余裕がよくある。そんなことで君側のお勧めが出来ると思ふか」と咎めましたが、自らは寝着のまま、不謹慎を詫びますと、帝は笑って「山岡、少しも構わぬぞ」と仰せられました。

夜が明け、騒動も鎮撫されたので退出しようとした鉄舟は帝に呼び止められ、「山岡、そちの携えておるその刀は、今

宵そちが誠忠の記念である。せひ、ここへ置いてゆけ」と刀をとりあげ、「この刀があれば、朕はそちと共にある心地して、心強く思うぞ」と仰せられたのでした。この刀は御所に置かれていましたが鉄舟の死後、帝は息子である直記を召されて、「そちの父が忠義の記念の刀である。大切に致せよ」と下賜されたのでした。

三島龍澤寺星定和尚に参禅す

皇居に勤める傍ら、休日には静岡県三島にある龍澤寺の星定和尚に参禅（提示された「公案」という問いの解明に取り組む事）しました。毎回徒歩で往復したという事です。毎回大変な健脚です。

なかなか公案は先に進みませんが、倦まず弛まず、三島に通う鉄舟でした。純粹な鉄舟の人柄が伺えるエピソードです。

以下次号（一峰 義紹）